

じやりみち

…被災地支援情報…

第64号 発行日：2000.7.28
被災地NGO協働センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL: 078-574-0701 / FAX: 078-574-0702
Internet: <http://www.pure.ne.jp/~ngo/>
E-mail: ngo@pure.ne.jp
口座番号: 01180-6-68566 (郵便振替)

いつの間にやら関西も梅雨明け。そしていつの間にやら、この7月8日で震災から2000日、7月17日で震災から5年半を迎えました。今回の「じやりみち」では被災地NGO協働センターの現在の主な活動について、これまでの流れとこれからの展望を特集してみました。総会報告と併せてご覧ください。

2000年度の 被災地NGO協働センター

(被災地NGO協働センター代表 村井雅清)

震災から5年が経過し、被災地は完全復興を目指して向かっている。復旧はともかく何をもって復興というのか、議論のあるところである。しかも「完全復興」となると、ますます曖昧なものであろう。未だに県外避難者は被災地に戻れず、また仮設住宅から災害復興公営住宅に移行したものの近隣との人間関係がつくれず、鉄扉の内側に閉じこもる高齢者も少なくない。一方直後の混乱から立ち上がった中小零細企業は、なんとか再建してきたにも拘わらず震災後の不況の影響も重なり、先行きが見えなくなっている状況である。

こうして見ると、震災の影響なのか、もう平常時の姿なのか、線引きが難しくなる。

このような中で、我々ボランティア・NPO・NGOは、震災直後から被災者の「くらしの再建」に視点をあき、活動を続けてきた。言い換えれば、主に国・行政の施策や制度から落ちこぼれた人々のために活動してきたとも言える。今年4月より導入された「介護保険制度」にともなうさまざまな課題が、そのことを顕著に現している。

一方日本社会は、中央集権型社会から地方分権型社会へと大きく舵をとり進み始めている。まだ現状では制度的・地方分権と言わざるを得ないが、これから先には地域分権さらには市民分権とゆるやかながら、市民主体の社会へと向かって行かなければならない。

この5年間、被災地は国内外からの多大なる援助を受けてきた。これらの援助に応えるように、これまで被災地からは多くのメッセージを発信してきた。「風化」が呼ばれるのに反して、国内外の人達は、常に「KOBE」からのメッセージを待っている。

私たちは大きなことはできません。
ただ小さな愛をもってやることはできます。(マザー・テレサの言葉より)



兵庫区に移転した被災地NGO協働センター。街中ですが、中庭付きの落ち着いたところです。冷房がなくて毎日暑いのが悩みですが……

昨年は、県・市も「検証」を掲げ、この5年間を振り返った。またNPO・NGOの側も、市民の目線で、検証をして来た。各々の「検証」の結果あるいは中間まとめとして、今年1月17日前後に発表された。マスコミの紙面に「市民活動」「市民主体」「市民とのパートナーシップ」などの文字が踊ったことは記憶に新しい。

5年目以降のKOBEを考えるとき、あらためてこの「市民」「市民主体」「パートナーシップ」の意味を議論し、各々の活動に反映し、現場に生かさねばならないのではないだろうか。当然ながら我々も、この5年を検証し、今後の活動方針をたてなければならぬ。キーワードは「自立」「連携」「協働」ではないだろうか。振り返って見れば、我々はすでに、1996年度の事業方針で「自立と連携」を掲げ、同じく1998年度には「協働」を掲げてきた。この5年間、じやりみちを裸足で歩くように、一歩一歩進んできた。足の裏も大変鍛えられてきたことだろう。「行動はローカルに、視点はグローバルに」とよく言われるが、あらためて「足もと」を見ながら、今年度の我々の事業計画を立てることにした。

これまで以上に、相互の連携と協働をもって、日々の活動に取り組みたい。

…被災地支援情報…

2000年度総会の報告 2000年6月30日 センタープラザ西館会議室(神戸・三宮)

去る6月30日に、2000年度被災地NGO協働センター総会が開催されました。

<2000年度運営体制>

- ◎顧問 梁 勝則(阪神高齢者障害者支援ネットワーク)
- ◎代表 村井雅清(ぐるうぶ・えん)
- ◎事業部長 細川裕子
- ◎監事 石井明美(ゆいまーる神戸)
笠部浩幸(青い空☆KOB)
- ◎運営委員
池田啓一(都市生活地域復興センター)
黒田裕子(阪神高齢者障害者支援ネットワーク)
福永年久(被災地障害者センター)
- ◎会計 福田和昭
- ◎専従スタッフ 鈴木隆太・増島智子・仲江川徹



出席9団体、委任状48通。

冒頭で議長に黒田さん(阪神高齢者・障害者支援ネットワーク)を選出。

1. 1999年度事業報告案について

細川事業部長より事業報告案の説明がなされ、質疑応答が行われました。

2. 1999年度決算案について

福田会計より決算案の説明、有光監事より監査報告がなされました。その後、質疑応答が行われました

◎1999年度事業報告・決算案とも全会一致で承認されました

3. 2000年度事業方針案について

細川事業部長より事業報告案の説明がなされ、質疑応答が行われました。

4. 2000年度予算案について

福田会計より予算案の説明がなされ、質疑応答が行われました。

◎2000年度事業方針・予算案とも全会一致で承認されました

5. 2000年度運営体制案について

代表については、村井雅清が立候補し、前年度に引き続き代表職を担つことが承認されました。事業部長については村井代表より細川裕子が推薦され、承認されました。

※その他の役員については左記の運営体制をご参照下さい。

2000年度事業方針

1. 被災地内外へ向けての情報発信

- (1)通信「じゅりみち」の発行
- (2)ホームページの作成
- (3)メーリングリストの活用
- (4)寺子屋の開催

2. 市民版生活支援センターの構築を目指した活動を継続

3. 被災地を中心として活動する中間支援組織との連携・協働

- (1)生活復興情報プラザ・運営委員会への参画
- (2)「しみん基金・KOB」への参画
- (3)その他の団体との連携・協働

4. 行政との「真のパートナーシップ」の形成

- (1)被災者復興支援会議が呼びかける各フォーラムへの参加
- (2)生活復興情報プラザ・運営委員会への参画
- (3)NPOと行政の生活復興会議への参画
- (4)その他の活動

5. この5年間で被災地に生まれた新しい「しくみ」との連携と協働を図る事業。

- (1)「しみん基金・KOB」への参画

(2)「市民しごとづくり事業協同組合」への参加

- (3)「市民とNGOの『防災』国際フォーラム」の事務局受託
- (4)「市民検証研究会」へ会員としての参画
- (5)「くらし・地域・21」研究会へ会員としての参画
- (6)その他被災地にとって必要と思われる事業を推進する。

6. 国内外の災害救援活動

- ・国内における災害救援活動
 - (1)「震災がつなぐ全国ネットワーク」の事務局受託
 - (2)「有珠山噴火災害ボランティア支援全国ネットワーク」の事務局受託
 - (3)「有珠山噴火災害支援委員会・ひょうご」の事務局受託

・海外における災害救援活動

- (1)海外・緊急救援委員会の事務局受託

7. その他の事業

- (1)まけないぞう事業
- (2)「トルコ・日本村」仮設コミュニティーザクリエイティブ支援事業
- (3)フェリシモプロジェクト

....被災地支援情報....

被災地NGO協働センター
1999年度決算報告

1.一般会計 1999年4月1日～2000年3月31日

(収入の部)

	予算額	決算額	備考
会費収入	500,000	702,000	
事業収入	2,570,000	916,452	
預託事業費	2,400,000	5,522,834	
寄付金	3,000,000	3,245,230	
助成金収入	5,000,000	4,600,000 *1	
預金利息		134	
前年度繰越	6,882,024	6,882,024	
合計	20,352,024	21,868,674	

(支出の部)

	予算額	決算額	備考
<事業費>			
1.情報の収集と発信	1,872,000	1,531,864 *2	
2.ネットワークづくり	4,240,000	5,918,893	
3.提言・提案活動	2,108,000	1,168,662	
<管理費>	7,044,000	6,787,806	
スタッフ活動費	2,160,000	2,340,000	
事務所賃貸費	1,440,000	1,440,000	
旅費交通費	840,000	745,640	
車両運用費	240,000	42,940	
電話代	780,000	976,138	
印刷費	840,000	578,550	
その他事務経費	744,000	664,538	
<その他>			
予備費	300,000	0	
次期繰越金	4,788,024	6,461,449	
合計	13,308,024	21,868,674	

2.特別会計

ア)まけないぞう事業

(収入の部)

	予算額	決算額	備考
事業収入	19,200,000	12,926,849	
寄付金	1,200,000	933,991	
助成金収入	1,000,000	3,644,000	
預金利息		204	
合計	21,400,000	17,505,044	

(支出の部)

	予算額	決算額	備考
<事業費>			
1.ぞう製作・販売の促進	13,060,000	9,635,087 *3	
2.ぞう製作講習会	96,000		
3.ありがとうキャラバン実施	1,800,000	1,948,673	
4.ぞう通信の発行	384,000	164,867	
<管理費>	4,240,000	5,401,455	
スタッフ活動費	2,160,000	2,160,000	
事務所賃貸費	1,320,000	1,610,000	
旅費交通費	180,000	176,400	
その他事務経費	180,000	1,184,515	
車両維持費	400,000	270,540	
<一般会計へ>	1,820,000	354,962	
合計	21,400,000	17,505,044	

イ)フェリシモ もっと・ずっと・きっと プロジェクト

(収入の部)

	決算額	備考
事業収入	3,661,792	
助成金収入	18,993,809 *4	
その他の収入	515,879	
合計	23,171,480	

(支出の部)

	決算額	備考
総事業費	13,997,701	
次年度繰越金	9,173,779	
合計	23,171,480	

<備考>

*1 日本財団より

*2 各事業費にはスタッフ活動費を含む

*3 1.と2.の合算

*4 (株)フェリシモより

被災地NGO協働センター
2000年度予算

1.一般会計 2000年4月1日～2001年3月31日

(収入の部)

	予算額	備考
会費収入	500,000	
事業収入	6,676,000	
寄付金収入	3,000,000	
助成金収入	1,500,000	
前事務所敷金返却	1,200,000	
前年度繰越	6,461,449	
合計	19,337,449	

(支出の部)

	予算額	備考
<事業費>		
スタッフ活動費	4,140,000	
1.被災地内外へ向けての情報発信	1,616,000	
3.被災地を中心として活動する中間支援組織との連携・協働	78,000	
4.行政との「真的パートナーシップ」の形成	78,000	
5.この5年間で被災地に生まれた新しい「しくみ」との連携と協働を図る事業	78,000	
6.国内外の災害救援活動	1,086,000	
<管理費>	5,984,000	
スタッフ活動費	1,860,000	
事務所賃貸費	720,000	
福利厚生費	80,000	
旅費交通費	840,000	
車両運用費	240,000	
通信運搬費	180,000	
電話代	780,000	
その他事務経費	1,284,000	
<予備費>	200,000	
<次年度繰越>	6,077,449	
合計	19,337,449	

2.特別会計

(1)まけないぞう事業

(収入の部)

	予算額	備考
事業収入	14,400,000	
寄付金収入	480,000	
助成金収入	1,000,000	
合計	15,880,000	

(支出の部)

	予算額	備考
仕入費	2,280,000	
スタッフ活動費	4,440,000	
福利厚生費	160,000	
事業委託費	180,000	
通信運搬費	1,360,000	
電話代	120,000	
旅費交通費	920,000	
車両運用費	684,000	
事務消耗品費	240,000	
材料費	270,000	
印刷費	130,000	
事務所賃貸費	1,260,000	
車両維持費	300,000	
商品開発費	500,000	
貸倒借却	200,000	
一般会計へ	2,836,000	
合計	15,880,000	

(2)トルコ・日本村支援事業

(収入の部)

	予算額	備考
事業収入	3,000,000	
合計	3,000,000	

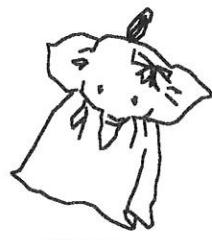
(支出の部)

	予算額	備考
スタッフ活動費	600,000	
旅費交通費	400,000	
福利厚生費	40,000	
電話代	50,000	
一般会計へ	1,910,000	
合計	3,000,000	

....被災地支援情報....

2000年度の
被災地NGO協働センター

まけないぞう

神戸のまけないぞうが、
日本のまけないぞうへ、そして世界のまけないぞうへ

震災から5年半が経過した現在、被災地NGO協働センターは、被災地内ではまけないぞう事業、被災地の外では災害救援事業を中心に活動しています。もちろん他にもいろんな活動をしている、あるいは取り組もうとしているのは、前々ページの事業方針の概略にも掲げたとあります。今回の「じゃりみち」では、「まけないぞう」「災害救援」それぞれについて、震災以降これまでの取り組みと、これから課題についてまとめてみました。

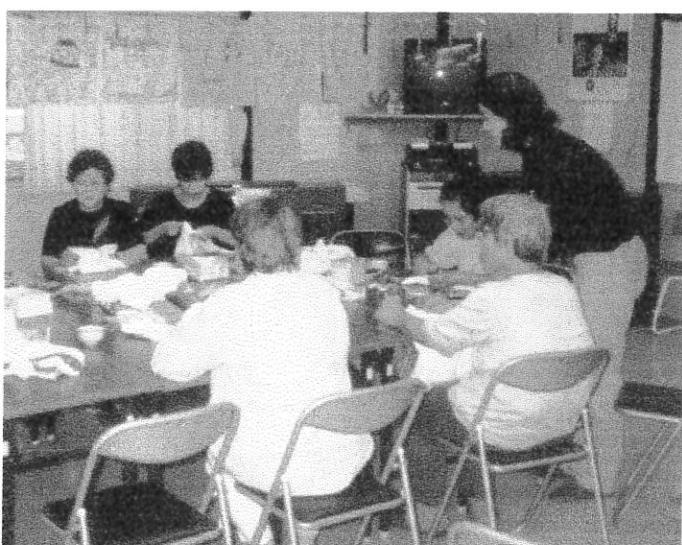
震災から5年半

1995年1月17日阪神・淡路大震災が発生しました。約7,000人の尊い命が失われました。改めて犠牲者の方達に追悼の意を表したいと思います。一言で死者何人と言ってしまえば簡単ですが、その一人ひとりの命重さや背景を考えたら一言では言い尽くせません。

この5年の間、被災地では様々なことがありました。悲劇を乗り越えようとしている被災地では、今もなお復興の道を歩んでいます。避難所から仮設、そして復興住宅、あるいは県外へ多くの被災者が多くの「仮の住まい」を経験し、今こそ真の復興へ歩み出しています。震災後も、失業・コミュニティの再生・自殺・孤独死など様々な問題が発生しました。特にマスコミや紙面に流れるニュースでは「孤独死」がよくありました。現時点でも約300人の方たちが誰にも看取られずに孤独な死を迎えていました。この間、被災者は「まだ、自立していないのか」「甘えているのではないか」といった声もよく聞きました。「自立とは一体何なのでしょうか」。「自立」できないから、「孤独死」するのでしょうか。

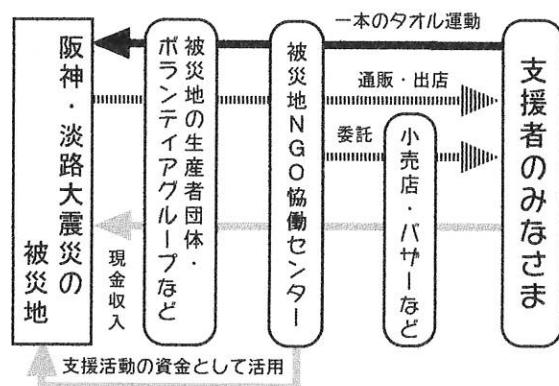
孤独死と「孤独な生」

震災前までは、日々の近所付き合いや交流によって、地域が活性化され、何かあったときでも助け合う、というコミュニティがある程度できていました。しかし、それが震災で、家や家族を失い、仮設や転居先という新たな土地、新たなメンバーでコミュニティを再構築せざるを得なくなりました。特にお年寄りにとっては、精神的



「まけないぞう」作り手への制作講習会の様子。

まけないぞうのしくみ



な不安が大きく、心の余裕もなく、ただただ家に閉じこもるというケースが多くなります。以前は、“市街地”に住んでいて、買い物・通院でも5分や10分で行けた範囲が“市街地”から離れた仮設では30分から1時間以上かかる所もあります。被災者は従来の生活基盤や人間関係を瞬時に奪われ、今までとは全く違った環境下に置かれ、生きるだけで精一杯の毎日になってしまったのです。そして、次第に「孤独な生」に陥ってしまい、最終的には、“孤独死”という事態を招くのです。つまり、「孤独死」の前には“孤独な生”があるので

ボランティアはこの「孤独死」を防ぐため、様々なプログラムを実施しました。「孤独死」の前にある「孤独な生」をなくすため、茶話会、入浴サービス、安否確認、配食サービス、クリスマスパーティなど本当に多彩なプログラムでした。しかし、このような活動は、人間関係づくりには役立ちましたが、仕事・生きがいづくりまでには至らなかったのです。このような人間関係もなかなか持続しないのです。このような状況下では、被災者は仕事を得る、生きがいを作る、という“自立”はもちろんのこと、安定した人間関係でさえも維持することが難しいのです。仕事や生きる気力を失い、被災者は“自立”する意欲を奪われ、内にこもり孤独な毎日を過ごしてしまうのです。

「まけないぞう」の輪

そこで当センターでは、97年7月からこの「孤独死」を防ぐため、失業者の仕事づくりのため、生きがいを失い、生きる力を失った人たちのために、「孤独な生」を防ぎ、「自立」して生きていけるように、全国から「一本のタオル運動」を通して、タオルを提供していただき、「まけないぞう」という壁掛けのタオルづくりを始めました。

....被災地支援情報....

ぞうの作り手には、制作費として100円を支払い、当初長田のケミカル業界の内職を失った人たちの中では、月10万円くらいを稼ぐ人たちもいました。内職の域は越えませんが、確実に生活の糧にはなりました。また、コミュニティづくりのきっかけにもなりました。これは特に仮設住宅で、知らない人同士が隣同士になり、話すきっかけもなく、内にこもってしまいがちな人たちが、「まけないぞう」を作り始めて、友人から友人へと「まけないぞう」のことが伝わり、友人の輪が広がり、途切れがちだった友人の付き合いも再開し、新たな友人もできたというケースがありました。

自立とは“支え合う”こと

そして、人間にとて一番大切な生きがいですが、仮設住宅に暮らしていた肺に病気のあるAさん、いつも携帯の酸素のボンベを持っていて、震災前からずっと人に支えられていました。けれども「まけないぞう」が広がることで、支援者の方々から「『まけないぞう』を頂き、逆に勇気や元気を頂きました」というメッセージが多く届くようになりました。彼女にとっては「こんな私でも人の役に立てる」と、生きる張り合いを見つけることができたのです。彼女は「まけないぞう」に出会うまで、一年に何度も入退院を繰り返していましたが、「まけないぞう」づくりを始めて、入院回数はめっきり減りとても喜んでいます。精神的にはずいぶん明るくなっていましたが、肉体的には確実に体力が弱ってきており、とうとう7月に検査入院してしまいました。けれど、彼女は「まけないぞう」があったからここまでこれたと今でもがんばっています。どうぞみなさん応援してあげてください。

これは今まで、支えられ続けてきた被災者が支える側になり、お互いに「支え合う」という関係になったのです。やはり人は支えられ続けるということは、とても“しんどい”ことです。だれでも人の役に立ちたい、自分の生きている存在価値みたいなものを認めてほしいものだと思います。“自立”とは「支え合い」だと教えられました。

お互いに支え合える社会に

震災直後にも、多くのボランティアが被災地に訪れ、その大多数の人々が私も何かの役に立てたらと思ってくれたと思います。その被災地では、「支える」・「支えられる」という関係を越えて「お互いに支え合う」という関係が生まれたのです。それが「まけないぞう」の活動を通して改めて気づかされたことです。そして、「一本のタオル運動」からでもたくさんのこと学びました。多くの学生が「一本のタオル運動」に取り組み、たった「一本のタオル」を送ることでボランティアができると、たくさんのタオルを集めてくれました。栃木県足利市では、高校生のボランティア団体「ふれんどしちゃ・たおる実行委員会」が発足し、倉庫まで作って「まけないぞう」事業を支えてくれています。これは地域住民との交流のきっかけ、ボランティアのきっかけとして広がっています。また、親子ぞうのセットになっている小さい子ぞうの「パオ」は関東を中心に、神戸の応援をしたいという人たちが作ってくれています。この活動も被災地はこれないけれど、地元でなら応援できるという人たちが、作ってくれています。また、これも地元の地域の活性化やボランティアのきっかけになっています。



全国各地を巡回する「まけないぞう・ありがとうキャラバン」。まけないぞうの運動は、KOBEだけでなく全国の支援者に支えられながら続いてきました。今年
小西ハナレニバハナ「中野・北陸便」アオ

こんな風に「まけないぞう」が被災者を支えるためだけでなく、いろんな人たちが支えられています。

そして、各地で起こる被災地にも「まけないぞう」を届けました。98年栃木・福島の集中豪雨、99年トルコ・台湾地震、2000年有珠山噴火など多くの被災者を励ますことができました。トルコ・台湾では特別キャンペーンを組んで、売上げを支援金として被災地に送ることができます。被災者である作り手も、無料で「まけないぞう」を提供してくれました。このように、被災地となった神戸から全国へ「支え合いの輪」を広げていきたいと思います。

「私たちは大きなことはできません。ただ小さな愛を持つてやることはできます。」

被災者・支援者という関係を越え、お互いに支え合うことが、大切なことです。「支え合う」ということは、人ととの繋がりがあるということです。“孤独な生”を防ぐことができるのです。そういう支え合えるコミュニティの構築がいま必要なのです。「一本のタオル」を送るという、小さな小さな愛がタオルとゾウに乗って、人から人へと広がっていきます。そしてお互いが支え合えるコミュニティのきっかけにもなるのです。

私たちは、あの震災のよって、「人間は一人では生きていけない」という当たり前のことを改めて身をもって気づかされました。そして、震災で学んだ最大のものは、地域コミュニティ、人と人とのつながりの大切さであり、今被災地で繰り広げられているのは「支え合い」です。神戸から日本へそして世界へ「まけないぞう」の支え合いの輪を広げていきたいと思います。

あの記憶は、このまま風化させてはならないのです。

約7,000人を越える尊い命を無駄にしてはならないのです。

このことから、私たちはまたいつどこで起きてくるかもしれない災害のため、身近で困っている人、孤独な人のためにも、私たちはこの「一本のタオル運動」と「まけないぞう」事業を続けていきたいと思います。現在、「まけないぞう」の販売が低迷しております。この「支え合い」を広げるためにも、ご協力いただけたら幸いです。どうぞよろしくお願いします。みなさんの温かい愛をお待ちしております。

(被災地NGO協働センター 増島智子)

被災地支援情報

2000年度の
被災地NGO協働センター

災害救援

1995年

緊急救援委員会

サハリン

「支え合いの社会を」と訴え続け、阪神・淡路大震災以後、重油災害・各地での水害・そして今年に入っての北海道有珠山での噴火災害において、確実に「ボランティア文化」というのは各地に根付いてきています。

1995年5月28日、神戸の震災から4ヶ月後にロシア・サハリンで大地震が発生しました。ここ被災地KOBEもさほど落ち着きを取り戻していないにも関わらずたくさんの支援をKOBEのみなさまから頂くことができ、短期間に約70tの物資と800万円の募金を現地に支援しました。これをきっかけに、国外においては、今まで22回に及ぶ緊急救援委員会の事務局を受け持ち自然災害に瞬時に反応し、支援活動を行ってきました。

また国内においては「震災がつなぐ全国ネットワーク(震つな)」を軸に災害救援を行っています。震つなは現在全国18団体が参加している災害ボランティアのネットワークですが、当センターの前身である「阪神・淡路大震災『仮設』支援NGO連絡会」が1995年から1997年にかけて行っていた、震災ガレキ・写真パネルの全国キャラバンでつながった仲間たちが中心となって設立したもので、やはり当センターが事務局を引き受けています。

昨年8月のトルコ北西部大地震では、被災者グループの方々が自ら「何かせなあかん」と夏の暑い中街頭募金を行いました。支え合い・お互い様とは、口で言うのは簡単ですが、実際はなかなか難しいものです。これらの出発点は、ここ被災地KOBEは震災後現在にいたるまで国内外を問わずに様々な方に支えられ、復興への道のりを一步一步歩んでおります。今度は、ここKOBEから各地へ応援・支援していこうというものです。

前述した、当センターが受け持つ2つの事務局で、実際当センターからも国内外へスタッフ派遣の一員として被災現地へスタッフを派遣しております。中での活動は様々で、コーディネーターとしてであったり、現地の視察などです。しかし、そのなかで「郷に入っては郷に従え」を鉄則に活動をしています。KOBEからの経験の押しつけではなく、逆に私たちはそれぞれの地でKOBEでは考えられなかったような、また、出来なかつたことが展開され勉強にもなっています。現在は、いかにこれらの災害救援を通して各被災地で学んできたことをKOBEに反映できるかと言うことが今後の課題となるでしょう。

この5年間で、国内外を問わずに様々な災害救援に取り組んできて、刻々と変わる被災地の状況を確実に把握して、ボランティアや物資だけを送り込めばいいのではないことを知りました。また、お金や物資を集めて、現地に届けるだけでは有機的な活動につながりません。支援して下さったみなさまにもはっきりと使途を説明し、現地との継続した情報交換が必要となります。KOBEを中継点として、「伝え続ける」ということも重要な役割と考えています。



1999年のトルコ地震支援。「愛と望みのテント」開設式。

現在継続中のものは、有珠山支援、トルコ北西部地震緊急救援委員会・台湾地震緊急救援委員会です。震災直後から現在の被災地NGO協働センターに至るまで、様々な活動の中で、もちろんKOBEのことも大切にしつつ、「災害」という同じ痛みを経験したものだからこそKOBEが発信点となり伝えていく事への重要性を実感しながら、この間災害救援に取り組んでいます。

(被災地NGO協働センター 仲江川徹)

1995年

緊急救援委員会

サハリン

神戸を忘れない
被災地からの発信
「全国キャラバン」

1996年

中国雲南省

中国南部

カンボジア
インド南部

イラン

次の災害に備えた検証と
顔の見える関係づくり

北朝鮮

震災がつなぐ
全国ネットワーク

1998年

中国河北省

アフガン
パプアニューギニア
アフガン

パプアニューギニア

福島・栃木水害

高知・神戸水害
ホンジュラス

1999年

コロンビア

ペルー

吳・神戸水害
メキシコ

トルコ

不知火町高潮
台湾

岩手軽米水害

ベネズエラ

2000年

中国雲南省

モンゴル
モザンビーク

被災地支援情報

最近の活動から

REPORT

トルコ・日本村支援事業

1999年8月17日にトルコ北西部で発生した大地震(マルマラ地震)では、1万数千人にのぼる死者・行方不明者を出し、阪神・淡路大震災以降では世界最大級の地震災害となりました。

この地震災害への政府支援の一環として、日本政府からトルコ政府に、阪神・淡路大震災で使用された仮設住宅の提供が行われました。この仮設住宅はサカリヤ県アダバザリ市の郊外に建設され、最終的に1,100戸の住宅となる予定で、原罪ほとんどが入居済みです。

被災地NGO協働センターでは、JICA(国際協力事業団:外務省の外郭団体)と協力して、「トルコ・日本村仮設コミュニティづくり支援事業」を開始しました。当面の課題は

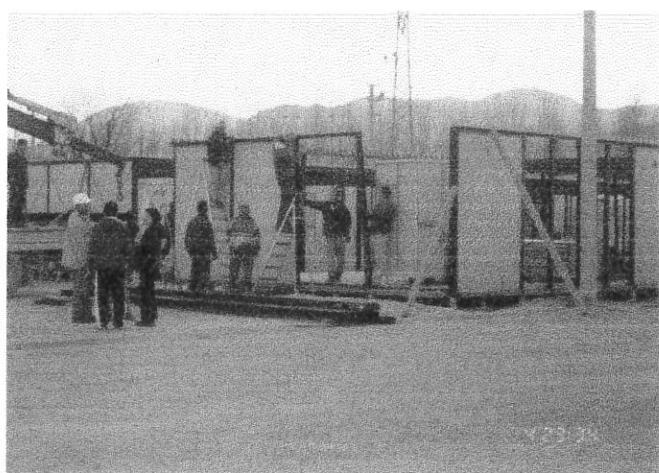
1. 仮設住民の「くらしの再建」をサポートすること。

2. 1のために、一日でも早く、自らの力で職を確保し、また仮住まいから恒久住宅へと送り出すこと。

の2点です。これらの目的を達成するために、さまざまなプログラムを企画し、あくまでも住民参画のもとに事業を実施していく予定です。現在当センタースタッフの鈴木隆太が、6月より3ヶ月の予定でトルコに滞在し、仮設入居者とのミーティングや、現地のJICAスタッフとの調整を続けています。

現地に入った直後は、仮設を訪問する際に必ず一回はゴミ拾いをする「体当たり作戦」で、そうすると自然に子ども達が集まってきてゴミ拾いをはじめ、それを見ている周りの人たちも一緒に手伝いはじめるのだと。いかにも草の根的ですが、そんな所からとっかかり始めて、毎週金曜日に開かれている住民代表者会議への出席、仮設住民への聞き取りなど地道な活動を続けています。

一番の課題はやはり「仕事」のようで、全体的な状況把握は出来ていませんが、約50%の方が職を失い、先の見通しが立っていないそうです。トルコの大地震からこの8月17日で丸1年。まだまだ先は長そうです。



トルコ・アダバザリに建設中の日本村仮設(1999年秋撮影)。阪神・淡路で使われた仮設住宅で、現在すでにトルコ地震の被災者が入居している。

REPORT

台湾地震・第4次派遣団

1999年9月21日の台湾大地震からもうまもなく1年が経とうとしております。7月7日から12日までの5日間という短い日程でしたが、台湾を訪問してきました。今回は、各支援プロジェクト(福龜村の福龜小学校の教師寮建設・東光村のコミュニティ支援・信義郷潭南村原住民支援)の進捗状況の確認と各YMCA(台北・台中・南投)のプログラムの視察が主な目的となりました。

記憶に新しい方も多いかと思いますが、先日大統領選挙が行われ、国民党政権から民進党政権へと政権交代がされました。選挙戦の始まる昨年末頃から、復興過程にも政治の力が、大きく影響をしていました。そんな中、今回お会いした、各YMCAの方や各支援プロジェクトを引っ張る邱氏や、

被災者の方たちの復興・再建に向けてのパワーは、実に力強いものを感じました。各YMCAでは、神戸YMCAがそうであったように、「心のケア」特に子どものケアに重点をおいて活動を展開していました。邱氏は、復興プロジェクトを進めるNGOのリーダーとは思えないほどのダイナミックな動きで、5年10年先を見越した活動を展開しています。福龜村や潭南村で会った被災者の方たちは「この震災をチャンスに!」と新たな仕事・技術の取得に取り組み、それぞれ野村全体の復興につながることを考えていました。

現在継続中のトルコ北西部地震緊急救援委員会においてもそうですが、「緊急救援」という位置づけでスタートしながら、1年という中長期的な支援になってきました。

もちろん、台湾におきましても仮設住宅も整備され、仮設住宅に入居できない方には家賃補助がでたりと緊急という時期は脱しているかと思います。しかし、KOBEでハード面の復興だけが取り上げられ、ソフト面の復興が置き去りにされてきたようにソフト面の復興を大切にすると中長期的な支援にならざるを得ません。

YMCAのケアプロジェクト・原住民のプロジェクト・東光村のコミュニティ支援等は、長い目での支援が必要で、何かと私たちも学ぶべき事がたくさんあるのではと感じました。

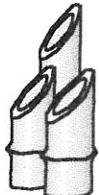


福龜小学校にて、現地の人々と一緒に。

(台湾地震・緊急救援委員会委員長代行 仲江川徹)

....被災地支援情報....

REPORT

被災地KOBEで研修実習

この春もいろんな方が当センターを訪ねて下さいました。大阪の松原高校の皆さん毎年KOBEに足を運んで下さいますが、今年は子ぞう「パオ」の制作と、灯りをともす竹筒の制作に取り組みました。朝のうちは静かな生徒さんだな……と思っていたのもつかの間、昼過ぎには若々しい歓声が辺り一帯に響いておりました。

まけないぞうの作り手、村上さんと
松原高校の生徒さんたちとのワンショット



いんふあめーしょん

INFORMATION

「兵庫人権フェスタ2000」のお誘い

兵庫県内の様々なグループの若者が集まって、「人権」をテーマにまつりの企画を練っています。協働センターからも若手のフタツフが参加しています。屋台・ステージ・各団体の発表や展示企画……「隣の人から信じたらええやん」をキヤッチフレーズに、よりたくさんの方の参加をお待ちしています。

今後の集まりの予定：8月7日(月) Beすけつと(神戸市長田区)
事務局：被災地障害者センター (tel:078-642-0142)

フェスタの日時・場所

11月3日(祝)
JP新長田駅南口広場
(神戸市長田区)

皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

私たち「兵庫人権フェスタ2000～隣の人から信じたらええやん～」(以下人権フェスタ) 実行委員会はメンバーそれぞれがマイノリティーもしくはマイノリティーを支援する団体で活動している若い世代の集まりです。マイノリティーに心を寄せる若者が、この度「人権フェスタ」というものを企画し、21世紀の“橋渡し”を仕掛けたいと考えています。そこで、「人権フェスタ実行委員会」に参加を呼びかけます。

みなさんが生活してきた20世紀、どんな時代だったのでしよう。この100年の間にも様々なことがめまぐるしく起き、一言では言い尽くす事ができません。それぞれの時代、それぞれの世代に、いろいろな経験をされていることだと思います。

そこで、私たちは「人権」という課題に着目し、悩んでいること・知らないこと・わからないことを否定せずに共有する「場」を作りたいと考えています。様々な問題・悩みを抱える若者にとって、自分たちの生活環境において、心や物質的にもまだ大きな壁があります。「バリアフリー」という言葉がありますが、この言葉の本当の意味を理解している人がどれくらいいるのでしょうか。この言葉は誰のためにあるのでしょうか。人権とはどういうものか、みなさんと一緒に考えてみたいと思います。

例えば、部落問題では、知られる怖さから事実を隠して生きている人がいて、見た目には何も変わらないの

に、差別される人がいます。また、障害を隠したり、無理にリハビリさせられている人がいます。また、多くの在日コリアンの人々が、出身や国籍・本名を隠して生活せざるを得ない状況が続いている。災害にあった被災者は、いつまでも甘えていると言われ生きる気力を無くしている人もいます。「アイデンティティ」を認めてもらはず、自分の個性をはがされていく気がしている人がたくさんいます。

みなさんの体験からも、きっといろいろな悩みがあると思います。その中で、それぞれが持っている「個」をこの機会に見つめ直し、互いの違いを認めた上で、「同じ人間や」、いろんな人間とどう共に生きるか、「共生」のためには何が必要で、何が大切なのか、一緒に考えて見ませんか？

誰もが社会の「主人公」になれるように、まずいろんな「人」が「個」が交わり、否定しないで語り合える場、出会いの場、共有の場を作りたいと考えています。この「人権フェスタ」が様々な人の問題を認めて、共に生きていける社会づくり、自由に生きていける社会づくりの布石になればと願っています。

この「人権フェスタ」を通じて、マイノリティー同士のつながりはもちろん、多くの市民に対して、マイノリティーの現状から見える課題を伝えることで、これから社会の在り方を共に探っていくきっかけにしたいと考えています。

この「人権フェスタ」が21世紀の未来につなぐ架け橋になることを願って……。

INFORMATION

e-mail、ホームページのアドレスが変わりました。

(旧)ngo@pure.co.jp→(新)ngo@pure.ne.jp

(旧)http://www.pure.co.jp/~ngo/→

まけないぞう 通信。

発行所：神戸市兵庫区中道通2-1-10 〒652-0801
被災地NGO協働センター

第17号 2000.7.28



まけないぞう
ゆかいな
仲間たち

♥おかげさまで第17号！！♥

梅雨も明け、本格的な夏を迎えた神戸では、暑さにも「まけないぞう！！」と作り手さんは、「まけないぞう」を作っていますが、支援者のみなさんはいかがお過ごしでしょうか？前号では「まけないぞう」の記念すべき「10万頭達成」のご報告ができ、とてもうれしかったです。今後とも、みなさんと末永く「支え合い」「つながりあい」たいと思っていますので、どうぞよろしくお願いします。

支援者からのメッセージ

皆様お元気ですか？毎日の活動ご苦労様です。私は2月にまけないぞうを送って頂いた者で、可愛いぞうが気に入り、少しでもお役に立てば・・・とタオルを送ろうと思いました。月に2回通う手話サークルで声をかけた所、聴覚障害の方（ほとんど聴覚障害者）がタオルを持って来てくれ、80枚集まりました。

いろんなタイプの物があり、使いづらいかとも思いますが、かわいいまけないぞうくんに変身させてあげて下さい。我が家でもタオルかけを使用しているので、2才の息子はすっかり“まけないぞう”的名前を覚え遊んでいます。5年前、和歌山で小さかったのですが、あの地震を経験、姉は西宮や大阪で被災したので、ずっと何か協力できれば・・・と思っておりました。ほんの小さな協力ですが、お役に立てれば嬉しいです。夏に向け、皆様体調を崩されることなく、活動して下さいませ。
神奈川県在住 女性

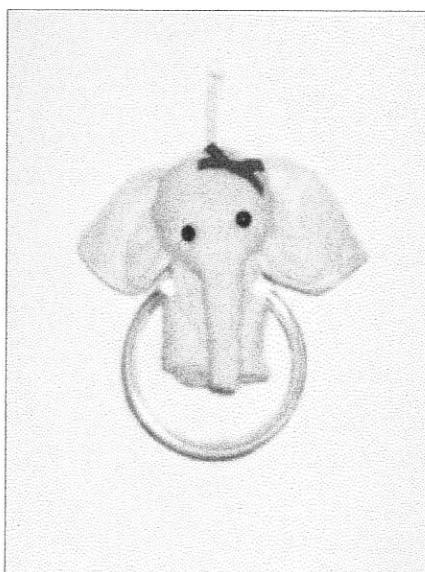
この3種類の「まけないぞう」の仲間たちをよろしくお願ひします。記念品や結婚式の引き出物プレゼントにどうぞ……



オリジナル

「まけないぞう」 ¥400

生まれてからみなさまの根強い人気を頂き、子どもからお年寄りの方まで愛される「まけないぞう」



「リングぞう」 ¥500

「まけないぞう」から広げよう支え合いでの輪！！愛の輪！！ということになり、輪が付き、タオルをかけられるようになっています。洗い替えが少ないのと、主婦の方には人気抜群



「親子ぞう」 ¥700

「まけないぞう」から生まれた子ぞうの「パオ」。この子がついてセットになっています。「パオ」は関東を中心に神戸の応援をしたいといふ方々が製作してくれています。

「一本のタオル運動」から レ 始めよう災害救援を!!

「一本のタオル運動」を レ 災害救援のシンボルに!!

日頃より、当センターに「まけないぞう」の材料となるタオルを送つていただき、ありがとうございます。前号で「一本のタオル運動」から「レスキューストックヤード」のご協力をお願いさせていただきました。この事をもっと広く呼びかけようと言う提案がスタッフの中からあがり、改めて支援者のみなさんにお願いする次第であります。↗

←みなさんから送られてくるタオルには「少しでもお役に立てたら幸いです」とたくさんのメッセージがついてきます。「一本のタオル運動」はたつた「一本のタオル」を送ることで現地へ行かなくても被災地とつながることができます。また、ボランティア活動へのきっかけとして、多くの子ども達もこの運動に取り組んでくれています。地元の地域住民との触れ合いや地域におけるコミュニティづくりのきっかけとしてもこの運動が定着しつつあります。被災者はどんなみなさんの温かい広がりを受け、今まで以上に一針一針心を込めて「まけないぞう」を作っています。この運動を通して、本当に多くの方々とつながりを持つことができました。人と人がつながることで新しい気づきや学びを得ることができます。災害は、「人間は一人では生きていけないんだ。」ということを教えます。↗

←こうして災害救援という一つの取り組みがきっかけとなり、社会がつくられていくものと確信します。丁度、「レスキューストックヤード」という仕組みが名古屋に出来ました。このようなどこに平常時からタオルをストックしておき、緊急時に即時役立つ救援物資として、被災地に届けると言うシステムを作りたいと考えています。↗

↗さて、おかげさまで「一本のタオル運動」を通して、全国各地にたくさんの人のつながりができました。震災後、KOBEEのみならずKOBEEを支えて下さっている方々の間では、「防災」は「友だちづくりから」と言われるようになりました。何かあつたとき友だちや知り合いかいれば、誰かが助けに来てくれるからです。実はこのことは、災害時だけでなく通常の生活の中でも言えることに気づきました。いま、日本の社会では少子・高齢化や環境、教育、そして低年齢化的犯罪など様々な問題を抱えています。このような問題に対しても、日頃から「支え合い」や「助け合い」があれば何かあつた時でも役に立つことが出来ると思います。「一本のタオル運動」は、「支え合い」「助け合い」のシンボルとして育ってきたのです。これまで阪神・淡路大震災の被災者は皆さんの温かい心に支えられてきました。震災から5年が過ぎたとき、スタッフの中から「考えてみれば台風でも地震でも、災害にはタオルは欠かせません。震災から生まれ、育ったこの「一本タオル運動」をすべての災害時にも役立たせることができればすばらしいのでは。」という提案があり、こうして「まけないぞう事業」にタオル提供をして下さる方々にお願いする次第であります。↖

↗だから「一本のタオル運動」は、災害救援のシンボルなのです。タオルが人と人をつなぎ、支え合いの社会を育んでいきます。↖

↗考えてみれば、タオルといふものは、一本一本の糸がタテ、ヨコに紡がれてできあがります。人の社会もタオルのようなものです。ボランタリーな活動といふタテ糸と支え合いのしくみといふヨコ糸が重層的に絡み、理想的な社会はできあがるものではないでしょうか。↖

↗もう一度改めて皆さんに「一本のタオル運動」へのご協力を呼びかけます。そして「まけないぞう」支援にとどまることなく、災害救援にも役立たせて頂くことをお願い致します。



新品であれば色・柄物・宣伝入りのものでも何でも構いませんので、是非ご協力下さい。

「まけないぞう」事業に ご協力下さい

被災地KOBEは今年で5年の節目を終えました。震災の象徴とも言える仮設住宅が解消され、被災者はまた新しい環境の中で試行錯誤の毎日を繰り返しています。ハード面では落ち着きを取り戻したものの、これからがソフト面「ここ3の復興」「くらしの再建」といつた復興への長い道のりを歩みだしています。

しかし、災害復興住宅の高齢化率は一般住宅の3~4倍とも言われ、少子高齢化社会が拍車をかけ、もう何十人の人たちが「孤独死」されています。なかには、半年以上前に亡くなり、ふとんの上でミイラ化していた人もいました。被災者にとっては、仮設から恒久住宅へ移つてからも、「孤独」で辛い現実があります。しかし、このことは被災地に限つたことではなく、高齢化社会を迎えた日本の各地で近い将来直面する状況だと感じています。

このような状況の中で、被災地では「ここ3の復興」「くらしの再建」に向け、しごとづくりや生きがい作りなどの新しい「芽」が出てきています。そのひ

とつに「まけないぞう」もあります。作り手さんは「まけないぞう」に会つてから、今までにない新しい経験をたくさんしています。例えば、ベテランの作り手さんは講師になつたり、ボランティア活動に参加したり、若い人と触れ合う場が多くなつたり、新しい友達が出来たりと初めての経験がいっぱいあります。このことから作り手さんは、寂しく・辛い生活から徐々に解放され、楽しく・うれしく・前向きに生活されています。

被災地の復興もこれからです。震災で奪われた約7,000人の尊い命を無駄にしないため、これ以上「孤独死」を出さないためにも、「まけないぞう」の作り手さんをもっと増やしていきたいと考えています。現在、販売が頭打ちとなり作り手さんを募集できません。どうぞ、みなさんここでも一度「まけないぞう」にご協力を願いします。

みなさんの温かいご支援をお待ちしております。

有珠に渡つたまけないぞう

今年3月31日に噴火した北海道・有珠山では、次第に避難勧告が解除された地域も広がり、噴火直後は1万1千人だった避難者も、北海道新聞によると、7月末には400人を切る見通しです。洞爺湖温泉の営業再開など復興へ向けたニュースも多い中、噴火口に近い地域では住民の集団移転が検討されるなど、先の見通しが立ちにくい地域も残されています。

5月末と7月上旬の2回に渡つて、愛知県の「レスキューストックヤード」が、この有珠山噴火の被災者にR₂/パック(アルアルパック)を届けに行きました。

レスキューストックヤードは、阪神・淡路大震災で、各地から送られた救援物資が、雑多な内容物や置く場所や仕分けの手間、配付の難しさなどから「第二の災害」と呼ばれたことを教訓に、ふだんは地域のリサイクルの拠点として活動し、災害時には必要な物資を必要なだけ送り出せるよう考案出された「民間版災害対策備蓄倉庫」で、今年の春に活動を開始しました。

R₂/パックは、緊急援助のための懐中電灯やせつせんやタオルやラップやその他諸々の小物をリユックに詰め込んだパックで、支援者から寄せられた物資をリサイクル・リフォームした上で、あらかじめ被災地外で仕分け／パッキングした後、被災地に届けます。



噴煙を上げ続ける有珠山（6月上旬撮影）

今回の有珠への配付では、このR₂/パックに「まけないぞう」が神戸からのプレゼントとして添えられました。

後ほど被災者の方から返信されたアンケートには、もうつて嬉しかった物の多くに「まけないぞう」を挙げて頂き、「負けない象を頂いたので頑張る象です」「リユックサック、まけないぞうを頂いた時には本当に涙が出ました」など、様々なメッセージを寄せて頂きました。

震災の被災地から、火山噴火の被災地へ、少しでも心のキヤッチボールのお手伝いをさせて頂けたのかな、と思うとありがたい限りです。



7月30日スタート！

1998年秋から全国を駆けめぐつている「まけないぞう・ありがとうキャラバン」。いよいよこの夏「中部・北陸編」スタートです(このぞう通信が届く頃には、もう始まっているかもしれませんね)！

「ありがとうキャラバン」では、まけないぞうの販売を始め、被災地の報告や、写真パネルの展示、みなさんを交えての意見交換や交流会、子ども「パオ」を実際につくつてみる講習会などなど……さまざまな方式で、ぞうさんの旅を続けています。

みんなの街の近くにキャラバン隊が現れたら、ぜひぜひ覗いて、声をかけて下さいね！

多くのみなさんとの、素敵な出会いをお待ちしています！！



- (1) 7月30~31日 群馬県群馬郡箕輪町
- (2) 8月1~2日 石川県加賀市
- (3) 8月3~4日 石川県小松市
- (4) 8月5日 岐阜県美濃加茂市
- (5) 8月6日 長野県上田市
- (6) 8月7日 岐阜県岐阜市
- (7) 8月16日 長野県諏訪市
- (8) 8月25~27日 新潟県刈羽郡高柳町

- 救世新教
大聖寺
エールを送る会(勝光寺)
わらべ村
中澤さん
長良中学校
地蔵寺
松吟寺

ここに掲げた開催地は7月27日現在で確定している場所・日程です。
この他にも現在調整を進めているの開催予定地がいくつかあります。最新の日程や開催地など、お気軽に被災地NGO協働センターまでお問い合わせ下さい。(まけないぞう専用tel: 078-511-8698)